

知覚可能性と認知的侵入可能性

源河 亨 (Tohru Genka)
慶應義塾大学 文学研究科

本発表では、知覚の哲学の動向を振り返り、またそれを踏まえて、近年注目を集めつつある問題を紹介する。知覚の哲学の動向としては、センスデータ説から志向説への移行を、注目を集めつつある問題としては、さまざまな事物の知覚可能性と認知的侵入可能性(cognitive penetrability)を取り上げる。

かつて有力であったセンスデータ説の目的は、不可謬な知識の基礎を知覚に求めることであった。そこでセンスデータ説論者は、幻覚などの事例を取り上げ、その場合でも色や形といった可感的性質が知覚されていることは誤りえないと主張する。たとえば、実際にはトマトなどないにもかかわらず、トマトを見ているかのような経験をもっているとしよう。その場合でも、赤さや丸さが意識に現れていることは誤りえず、そのため、赤さや丸をもつ非物理なセンスデータが知覚されていると主張する。そして、赤さや丸さといった不可謬に知れる対象だけが知覚されたものであり、本当にトマトがあるかどうかといったことは知覚から推論されると主張するのである。

だが周知の通り、センスデータ説は、世界への接触がセンスデータによって阻まれている構図になり、また、非物理的対象を導入する存在論的負担が大きいという困難を抱えている。この困難を乗り越えるため、志向説は、知覚経験は信念などと同じく志向的内容をもち、正しいときには外界の事物を表象しているが、誤っている場合には存在しないものを誤表象していると主張する。つまり、知覚経験が常に不可謬であることを否定するのである。こう考えると、幻覚の場合には存在しない赤さや丸さが誤表象されていたとすることができ、そのため、センスデータを導入しなくてすむ。

志向説が普及するのに伴い、さまざまな事物の知覚可能性が問われるようになった。センスデータ説は、不可謬に知れる色や形だけが知覚されたものだと主張していたが、そうした不可謬性を放棄した志向説では、色や形だけが知覚対象であると主張する（一見したところの）理由はなく、トマト性などの種性質も知覚経験によって正しく表象されたり誤表象されたりすると考える余地がある。さらに、他人の感情、道徳的・美的価値なども知覚可能であるかもしれない。これらの知覚可能性は、認識論的に興味深い。たとえば、他人の感情は常に推測されるわけではなくときに知覚されると言うことができるかもしれないし、価値の知覚は知覚に基づくと主張できるかもしれない。

とはいえ多くの論者は、価値などの知覚には（色や形とは異なり）学習や背景的知識が寄与すると考えている。たとえば、ある芸術作品がもつ優美さを知覚するためには、優美な作品を多く経験する必要があると考えられるのである。この

ことは、知覚以外の心的状態が知覚経験に影響するという「認知的侵入可能性」を認めることを意味する。知覚は認知的に侵入可能なのか、可能ならばどの程度までか、どのような仕組みで実現されているのか、ということが今後より注目を集めていこう。